

演出で来札した遠藤啄郎さんは今年米寿を迎え、会いに来た多くの人がそのはつらつとした気迫に元気をいただきました。

また、二〇一六年十一月に重い癌が見つかって闘病に専念したシタール奏者・井上憲司さんは、最先端治療

ドラマシアターどもだより *二〇一七年を振り返って

江別・ドラマシアターどもⅣ 安念優子

昨年は九月一五日～一八日に渡って、北海道演劇集団の「第二七回北海道演劇祭 in えべつ」が、外輪船を主会場・どもはパフォーマンス会場にして開かれました。その三日間、この千歳川に沿った江別発祥の地の、大正建造の二つの建物と周辺には、休憩所や食べ物屋さん、マルシェのテントが出現しました。

外輪船の出演劇団は、オホーツクからの三劇団、「海鳴り」(紋別)・「釧路演劇集団」(釧路)・「みずなら」(斜里)。

札幌からは「座れら」「新劇場」「劇団風の子北海道・福島」、江別は「川」「ドラマシアターども」。全国リアリズム演劇会議から「しろたに



釧路演劇集団「赤い陣羽織」

と驚異的な精神力で病を完全克服。二〇一六年九月以来一年四か月ぶりに来札した復帰ライブは本当に感動的なものでした。誰もがみな、生きて会えることの嬉しさに胸いっぱいでした。

まもるさん(川崎京浜共同劇団)が腹話術で友情出演。芝居の転換時間には(どもで)ろう劇団舞夢・しろまるさんのおとぎよみ・うるうる亭・ピエロショウ・落語・ベリィダンス・ロック・フォーク・ブルーグラス・・・全公演、舞夢サポーターズによる手話通訳つき。キャパ一五〇人・公演時間は一時間のルール。

主たる運営は、どもの若手と地元の実行委員会(若手の定義は?六〇歳以上はバックアップ)。キャッチコピーは「江別でひろげるつながりの輪」! 秋空の下、会場はどの公演も満杯に。親子で楽しめる公演、パフォーマンスもあり子供たちも多かった。

道演集の演劇祭は、一九六三年の砂川での一回目から始まり、江別では一九九四年・二〇一〇年・二〇一七年の三回目です。労働運動・農村の青年団・高校演劇:戦後の北海道の歴史の中で生れ、つながってきた「北海道演劇集団」。現在は二五劇団(八市町村)。地元の江別高校演劇部出身の私たち夫婦にとつては、高校時代札幌

で観た新劇場の役者さんや・劇団さつぽろ（退会）・高文連の仲間のみなさんのいるこの集団に支えられ、演劇道？を学ばせてもらってきたなあ・・・と振り返って思う。（まだまだ道演集について書きたいところですが、この辺でしめます。）

大奮闘のどもメンバーは一二月、恒例の「ども歳忘れ興行」五一団体二日間を運営・出演を終え・餅つきをして歳を越えて来ました。

どもの公演は、四月の三五年ぶりの北村想作・安念演出「寿歌」・九月演劇祭では、安念智康作・演出「とど山第三分教場パートⅢ―ヨッコの場合」一時間バージョン。ども興行では、ユニットでの参加。市内外のたくさんの方々にお世話になり、積み重ねた一年でした。

昨年の印象深い舞台は、六月のポーランド協会の尾形芳秀作・斎藤征義演出＊詩劇・ピウスツキー「ポーランド・サハリン・愛と死」。八月・一二月の二回、市内のろう者の方が主催企画の「目で聴くライブ」（大阪から）。

二〇一八年は、安念智康のライフワーク「とど山第三分教場」シリーズの新作上演を四月に予定しています。

三七年目のどもⅣは、ふるさと江別のこの街を野幌駅裏・高砂町二回・条町目と三回四か所引っ越して、この街の源流「条丁目」と地元の人が呼ぶ元郵便局のレンガの建物に巣くって早一二年。

今年は主催の安念は七〇歳・・・。
ヒヨドリが雪の中で囀っている・・・。
節分も近い・・・。

陽射しは春遠からじと伝えている。

海を越え、知らない街の老若男女思想信条の違いを超え人の群れる、芝居小屋に身を沈めて、心を揺らしてみたいと妄想に駆られています。留守を任せて、実現させるのが今年の夢です。

旅の一座に憧れてここまで歩いて来た私たち、「もうひと踏ん張り！」周りの力を借りながら前に進んでいこうと思います。

今年もよろしく願います。原稿依頼感謝します。

二〇一八、一



しろたにまもる 腹話術



劇団海鳴り「これからごはん」